

令和6年度第1回松戸市文化スポーツ推進審議会 議事録

1. 開催日時	令和6年11月18日（月）18時～20時15分
2. 開催場所	松戸市役所 新館7階 大会議室 (zoomによるオンライン含む)
3. 出席者等	【委員】(名簿順) 13名 熊倉委員(会長)、田簀委員(副会長)、岩下委員、 菊田委員、坂委員、局委員、山田委員、大成委員、 菊地委員、武田委員、羽賀委員、山根委員、和座委員 【松戸市】 教育長、文化スポーツ部長、生涯学習部長、学校教育部長 生涯学習部兼文化スポーツ部審議監 文化スポーツ政策課長、文化にぎわい創造課長、 国際推進課長、スポーツ振興課長、スポーツ施設担当室、 社会教育課長、文化財保存活用課長、博物館次長、 戸定歴史館長、図書館長、事務局(文化スポーツ政策課)ほか
4. 傍聴者	4名
5. 次第	1 会長および副会長の選出 2 本審議会の目的及び役割について 3 本市の文化スポーツ施策の現状と今後の方向性について 4 (仮称)松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針について 5 その他
6. 資料	資料1 本市の文化スポーツ政策の現状と今後の方向性について 資料2 文化関係(現代文化等)の取組事例 —市民・地域・企業との連携— 資料3 (仮称)松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針について 資料4 関連計画等について ① 松戸市文化複合施設について ② 松戸市文化財保存活用地域計画(概要・本編) ③ 松戸市スポーツ推進計画(本編) ④ 松戸市スポーツ施設整備方針(概要・本編)
7. 議事	以下のとおり

議題1 会長および副会長の選出

- ・松戸市文化スポーツ推進審議会条例第6条第1項に基づき、委員の互選によって決定した。
- ・会長、副会長挨拶

議題2 本審議会の目的及び役割について

議題3 本市の文化スポーツ施策の現状と今後の方向性について

議題4（仮称）松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針について

（事務局）

議事2～4まで資料を用いて一括説明。

（熊倉会長）

事務局より大きく2つ議事があった。1点目は松戸の文化スポーツの現状の説明、2点目はこの審議会の核となる「（仮称）松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針」の策定について、基本理念や方向性などについての案を示していただいた。

本日は、委員からそれぞれ日頃感じていること、松戸市民の暮らし全般と文化やスポーツはどのような関わりを現在持っていて、これから先どのような関わりをもっと持っていっていいかなど、日頃課題に思っていることなど、一言ずつ意見をお願いしたい。

（岩下委員）

東部地区のスポーツ推進委員理事をやっている。先ほどの説明を聞いて、市内でこんなにも多様なことをしているということを感じた。今後関わっていくにあたって、まずは、取り組みを知っていただくことから始められると感じた。

例えば、今こちらの子ども会の資料を見たところ、東部の方でもいろいろなサークルがあり、QRコードを読み込むと一目瞭然に、いろいろなところで何をやっているかっていうのがわかる。そのような形で、現在松戸市でやっていることが共有できる場が広がっていくといいと思う。

（菊田委員）

松戸市障害者団体連絡協議会から参加しており、自身も重度の障害をもった子がいる。これまで、松戸の文化財に触れる機会がなかったので、車椅子であっても触れられるものを、ここでたくさん知ることができれば。同時に、車椅子であっても楽しめるもの、こういうふうにとより参加できる等を、皆さんと共有できればと思う。

（坂委員）

松戸市子ども会は、スポーツ活動が盛んで、ソフトボールでは子ども会出身の選手が甲子園大会に出場している。ドッジボールは女子が主体だが、所属していた児童が陸上の選手、或いはバスケといった方面でも活躍し、成果を上げている。プロ野球選手も輩出されている。直近では、中学校の全国大会で松戸市選抜の中学生が全国優勝した。その中にも子ども会出身者が8名程おり、様々な形で地域の中で活

躍している。

ただ、ともするとその活躍する場が厳しい状況にある。グラウンドの整備をはじめ、学校の夜間照明、或いは体育館に空調等があれば、もっと幅広く活動ができると感じる。そのため審議会を通じて、松戸市の状況を勉強し、それに対する現場の声というのをお伝えしたい。

もう1点、ご提示いただいた松戸市文化複合施設の検討についての資料の中に、13～14ページで図書館のことが書いてあり、40万人以上の都市の中では松戸市の図書館というのが非常に弱い部分であると感じる。平成27年に図書館整備計画ができたが、それから一向に進捗していないと感じる。立命館大学の常世田先生とお話したときに、『図書館はただ本を貸出し・読むところではない。情報発信の一番の基地であり、世界や国内の各市においては、居場所づくりの拠点になっている』というお話を聞いた。そのため、文化スポーツの情報発信のあり方についても図書館の活用というのが1つあると感じる。

(局委員)

子どものときから松戸市で育ち、音楽をはじめ、今この場にいる。松戸市はすごく音楽が盛んなまちであり、そこから世界に羽ばたいて、また松戸に戻ってきて、いろんな生徒たちに音楽を教えてください方々がたくさんいる。

音楽協会は、一般団体の連合会になっており、末端の利用者の立場から、いろんなお話をさせていただければと思う。

(熊倉会長)

先ほど音楽ホールなどの紹介、現状の説明があったので、今後そのあたりの使い勝手や将来展望などもお聞かせいただければと思う。

(大成委員)

私もアーティストとして表現活動をしているが、いろんな人たちと協力しながら、アートをやっていくため、様々なアートプロジェクトに関与してきた。

現在は、子どもに関わる仕事に就きたいという学生にアートを教え、その中で資料2にある「アートパーク」と「松戸アートピクニック」を市内で実施している。

「アートパーク」は、松戸中央公園で、地域の子どもたちに集まってもらって、多様な表現活動を楽しむことが目的。多い時は2,000人の子どもが1日で来ており、地域から期待されているプロジェクトに成長してきたと思う。というのも、子どものためというものもちろんであるが、地域の様々な人たちと協力して実施しており、例えば PARADISE AIR のアーティスト、子育て支援の関係者、まちづくり関係者など、多くの人たちと一緒にイベントを作り上げるというのが、プロジェクトとしての成果だと思う。

「松戸アートピクニック」は、21世紀の森と広場で、どちらかというとのんび

り、期間も長く、子どもから高齢者まで、年齢を問わず公園に遊びに来た人も気軽に参加ができる取り組み。

何かを行うブースがあるというよりは、自然とアートが一体化して楽しめる空間というのはどういうものだろう、アートとは何だろうということを、アーティストや大学の学生と考えて実施している。

アートや芸術というと、取っつきにくいと思う方もいらっしゃると思うが、そうではなく、アートや芸術が日常の中に入ってきて、みんなで楽しんだり、感動したりという場が作ればいいと考え、実践につなげているところである。

（菊地委員）

私自身は小学校に勤めていたが、集団生活の場となる、学校生活の中では、音楽とスポーツは欠かせないものである。

スポーツで言えば運動会や体育祭、音楽で言えば音楽集会や合唱祭など、そのあたりは大抵どの小学校でも行っている。

また、人が集まると歌を歌うというのは習性であり、朝の会や全校朝会で歌を歌っている。また式典でも必ず歌を歌う。

これは単に技能を磨くというだけではなくて、友達と一緒に、全校や学年のみんなで、心を合わせて1つのものを作り上げるという情操も養っている。

また、松戸では部活動がとても盛んで、音楽系もスポーツも、全国レベルを有しているレベルの高い学校もたくさんある。

先日、学校で芸術鑑賞会があったが、和太鼓の公演で大きな太鼓を見るのも初めてな子どもばかりの中で、プロの演奏に触れるというのは、こんなにも子どもたちのためになるのかと感じた。子どもは前のめりで聞いており、本当に目を輝かせて鑑賞している子どもの姿を見ると、本当に子どもは可能性の塊である、将来何者にもなれる伸びしろがあると感じた。

今もこのようにたくさんのことを松戸市ではやっているが、子どもが様々な体験を体得できる、本物に触れられる、将来の選択肢が増えたりする取組が、もっと身近に、学校教育以外でも広がっていくといいと考えている。

（武田委員）

私は美術を、制作者として生業にし、縁があり10年程前から教育委員という形で松戸市に関わらせていただいている。

その中で、音楽フェスティバルやアートピクニックを始め、様々な施策が始まり、或いはその前から続いているものを知ることができ、感謝にたえない。

その一方で、同じ市役所内でも、横の連携が難しいということ、それにより周知がうまくいかないこと、一生懸命やっている施策に関して連携すればより良くなるのと思うことがある。

この新しい部の創設というものが、そういったものに一番良好な連携というもの

を作る第一歩、礎になっていったらいいと期待している。

それと、今、菊地委員がおっしゃった学校教育の中の部活動というところが、文部科学省がやっているように、民間連携が求められている。新しい部が様々な知遇を得て、或いはいろんな知識をいただいて、スムーズな形で子どものために、新しい形での部活動、或いは現在やっている行事の学校へのPRや参加の呼びかけをもっとスムーズにできたらいいと感じている。

（羽賀委員）

小学校2年生から、高校までずっと野球をやっていたが、高校卒業してすぐに、事故で車椅子になってしまった。そこから20年近く、車椅子ラグビーをやっている。その中で、パラリンピックに3回出場して、この前のパラリンピックでは、皆様の応援のおかげで金メダルを取ることができた。

私は文化スポーツ推進に関して、勉強や研究をしているわけではないが、これまでの経験の中から、自分で感じたこと等、感覚的な部分になってしまいかもしれないが、微力ながら力添えできればと思う。

（山根委員）

私はピアニストを目指していたが挫折し、音楽事務所を経て、武蔵野市民文化会館というコンサートホールで10年程クラシック音楽の企画運営をさせていただいた。そこを辞め、音楽事務所を始め今に至るが、現場を歩いてきたと思っており、お客様と常に接するコンサートホールにいと、うんちくよりも、お客様が「今日はよかったですね」と笑顔で帰って頂く瞬間が一番好きだった。そこに、根源的なものがある気がする。老若男女問わず、子どもからお年寄りの方まで、そういう気持ちでコンサートホールに来ていただき、帰っていただきたい。

或いは、コンサートホールではなく、学校コンサートもよく行われるようになっているが、アーティスト側も、次の世代へ伝えていくという義務感を皆さん持っている。そういった活動は、世界のトッププロと呼ばれる人たちも、あらゆる場所で行っている。トップレベルで活動されている方と触れると、刺激というものがあるので、皆さんに触れて頂きたい。

ただ、食べて、眠ってというだけではなく、人生を楽しむ、素晴らしい人生を送っていただく、その一助となればと私は常々思いながら活動している。今回もこうしてお招きいただいて、少しでもお役に立てればと思っている。

（和座委員）

私としては、文化或いはスポーツは、健康と密接に関連していることは言うまでもないが、町医者として、日々患者さんを見ている中で、健康と、スポーツ・文化とがどのように関係しているのか、日常の診療の中から、皆さんにお話できればと思う。

具体的に言うと、例えば慢性疾患について、高血圧、高脂血症、糖尿に関して、患者とお話する内容は、「食事」と「運動」のこと。運動について言うと、一般的に一番関心があり、アンケートを見ると、市民が、スポーツの中で何を一番やっているかというウォーキング、つまり歩くということ。

それを考えると、ウォーキングマップの作成。例えば、まつど健康マイレージという制度が松戸市にあり、それぞれの地区毎のウォーキングマップがある。その広報を含めて、ウォーキングをもっと身近な部分で市民が楽しめるように、例えば、お寺など文化施設等の説明やわかりやすい表示があってもいいと思う。そこら辺の環境整備というものが、これからもっと進むとよい。実は今日、そのマップで歩いてみたが、馬橋のマップを見ると萬満寺など、いろいろとある。そういうふうな身近な取組についての議論も、この場でできればいい。

それからあともう1つ、例えば子どもを見ているとやはり不登校や発達障害など、様々な問題がある。子どもの健康面で文化スポーツをみてもよい。今、子どもは二極化している。スポーツを活発に行う子もいれば、スマホの見過ぎや運動不足で、子ども口コモというものがある。そういう子どもに対して、どうアプローチをしていけば、将来健康な人生を歩んでいけるかの視点も必要である。

そういったときに、子どもの声というものを十分に聞いて、会議に反映させていく必要がある。大人だけが話していても、それは大人の視点になってしまう。こども家庭庁はまさにそれを「こども真ん中」と言っているが、そういう意味で、子どもがどういうふうにスポーツや文化をみているのか意見を聴いていく。と言っても子ども自身の考えを引き出すには工夫も必要なので、ファシリテーターが必要かもしれない、きめ細かくアンケートを聞くのもいいかもしれない。SNSを使うのもいいかもしれない、子ども会議を作って、子どもの意見を吸い上げながら政策に反映する流れもあるので、取り組んでほしい。

子どもの権利が4つあるがその中でも特に参加する権利というのが日本では非常におろそかにされている。子どもの意見を引き上げて、彼らがいろいろ提案したことが、実現する状況を作り上げることで、子どもが伸びやかに、もっと自信を持って進むことができるのではないかと。それはもしかしたら、不登校やいじめの本質的な部分にちょっとかかっているのではないかと考えているので、子どもの意見をできるだけ丁寧に吸い上げて、それを声にしてほしい。

最後にもう1つ。私は松戸市医師会というところで仕事をしているが、医師会は、町医者が患者から聞いた内容を政策に反映するということで、様々な提言ができる団体である。母親たちの声を聴き、任意接種であるおたふくの予防接種に対して、市長と医師会で協議し、50万都市としては全国でも非常に珍しく、就学前の子どもに関しては半額助成につなげている。医師会は非常に活動的で、本質的なところを考えている方々がたくさんいる。整形外科の先生の中で、子ども口コモについて関心の高い方もいる。小児科の医師の中には、発達障害の早期発見に向けて、5歳児健診が必要と考えている人もいる。私としては、こうした声を代弁しながらこの

会議でまた議論できればいいと思っている。

（山田委員）

私は小さい頃から剣道をやっているが、剣道を通して感じたことをお話したい。

剣道は昔から日本の文化であるということが言われているが、今そういう文化とは、どうも薄れたような気がしている。礼儀など、日本文化の良さを大いに出していけたらと思っている。

剣道はマイナーなスポーツなので、オリンピックにも入ってない。オリンピックの期間になると他のスポーツばかりで新聞紙上にも出てこない。そういったマイナーなスポーツを押し上げて日本全体がいろいろなスポーツに打ち込めるシステムができればいいと思っている。

また松戸は、遠征してきた団体が泊まる等の宿泊施設がないので、大会をやりたくてもできない状況である。文化スポーツの推進に向けては、十分整備してやらないと非常に難しいのではと感じている。

当初、文化スポーツ部の設置の話があったときに、文化とスポーツというの、同じ方向性でやるのが難しいと感じており、皆さんのお話を聞いていると、やはりいろいろな悩み等あるので、これからこの場で議論が進むにつれて非常に有意義なものになるのではないかと感じている。

（田簀副会長）

文化とスポーツ、これをどうまとめていくのか、なかなか難しいと感じる。

30年程前の話になるが、トップアスリートがハイパフォーマンスを見せて競い合う姿が合理的な動きで非常に美しいという話を学生時代から聞いていた。

私が学生の頃は、今と違い、スポーツについては、厳しい練習に耐えながらやっていく意識が強く、卒業後に学問の世界に入らないうちで、例えばダンスは、根源的な人間の欲求であり、かなり昔から人間は踊っていること、これはもう芸術であり、文化であり、現代までダンスというのがいろんな形で受け継がれている。そういうことを考えれば、文化もスポーツも、結びつけることは決して難しくはない。

それともう1つ、芸術の文化もスポーツも、いわゆるノンバーバルコミュニケーションツールであり、言語がなくても、何か理解し合えるという部分がある。今、本当にいろんなお話を聞かせて頂き、私自身ももう一度、深く考えることができればと思っていた。

私は、2021年の3月まで大学の陸上部の監督をして、資料1に記載の、「スポーツのする、みる、支える」について、国も同じ概念を出しているが、学生は、やはり「する」に尽きる。

またもう一つ別のスポーツの捉え方では、広義のスポーツの概念と、狭義のスポーツの概念があって、学生は、狭義のスポーツでとらえている。広義のスポーツというと、際限なく広がってしまってもとまりがつかない。そのため、この会議が進

んでいく中でも、スポーツの概念のすり合わせが必要である。1人の委員がスポーツと思っていても、もう一方はスポーツとは思わないということがあってはあまりうまくかみ合わない。

(熊倉会長)

スポーツも文化も定義もなかなか難しい。資料2にはコスプレイベントの記載があり、この辺も文化と言え文化であるが、何が文化か定義もやはり多様化していて難しい。

先程、伝統的な文化でありスポーツである武道について、進んでやろうという子が少なくなっているという声もあった。副会長のお話にもあった、昔のような指導はすべきではないように、時代の概念は変わっていくし、特に今は少子化なので、子どもと大人がどういう関係を結んでいくのかということも難しくなっている。

様々な分野からお話を伺いたいところだが、例えば、そもそも今の子どもは、体育の授業が成立しないと以前聞いたことがあり、今回の話でもあったが、子どもはスマホから離れてくれないのだろうか。

松戸市は、文化やスポーツで関わっている、ご活動している方々がたくさんいて、とても盛んにいろいろなことをやっていると感心していたが、何か足りないもの等はないのだろうか。例えば、子ども会のパンフレットを見ると、子ども会は主にスポーツをやっているようだが、たまたまこのパンフレットが割とスポーツよりだということだろうか。

或いは、学校では、機会があれば歌を歌うという話があったが、一方で今日のニュースでは、学校の先生の給料について、文科省と財務省とで調整がつかず、10年位前から、部活動を民間移行するという話も出ているが、学校現場の先生方はどう考えているのか。

或いは、多様な子どもが今いる中で、みんながスポーツや文化に接せられる環境なのか。家庭環境の難しさなどで、そういうところから排除されてしまっている子がいるのではないか。

そのあたりを含めて、もう一度、委員からご発言いただきたい。

(坂委員)

松戸市子ども会は、県内の自治体と比較して、スポーツ活動が盛んな事が特徴的なので、スポーツのことを紹介させていただいた。ご存じのように地域で活動しているため、学校は1年生～6年生の学年の階層でお友達を作るが、地域では縦の関係、1年生が6年生と、或いは3年生と4年生という形で、地域の中で友達を作るようになる。そのため、活動を通じて礼節と協調・スポーツ技術など、監督やコーチの指導を受けるという環境で地域と結びついている。

一方、子ども会は各地域で様々なことをやっているのので、例えばコスプレ的なことと言えば、或る地域ではハロウィン仮装パーティーに500名余りの参加者で、

地域みんなで楽しむ活動をやらせていただいている。

子ども会のキーワードは、「地域と学校とみんなが体験を通じて楽しく、豊かに過ごせる活動」としているが、活動を維持するには適切な場所が必要で、そういう施設が整えばいいと思っている。特に、スポーツ関係は、老朽化した施設も多く、部分的には改修工事が進んでいるが、活動するにも駐車場やグラウンドが狭いなど、課題があると感じる。

（大成委員）

保育園児や幼稚園児など、小学校より下の子どもは、アートパークに沢山来る。幼稚園教育要領や保育所保育指針の中では、音楽、図工、体育は表現という一括りになっていて、分かれていない。学齢が上がるに従って、スポーツと図工、さらには美術、絵画、彫刻と分かれ、より専門的になっていく。

今回我々が定義や範囲を考える中で、幼児期の「表現」みたいなところに、もう1回立ち返ってみると、すんなり受け入れられる部分もあるのではないかな。

（熊倉会長）

世界的に、中高生の関心を引くのはとても難しいというのはアートの専門家中で常識となっている。外国籍の子ども、障害児、メンタルの部分など、特に様々な子どもたちが在籍する学校では、音楽やスポーツなどはどうなのだろうか。

（菊地委員）

小中学校は義務教育で、学習内容は、国が定めた学習指導要領に基づいて行う。これが日本の教育のすごいところで、沖縄から北海道まで、どこにいてもその学年で学習することは同じである。その中に、音楽、図工、体育がある。そのため、一通りはみんな同じ教育を受けている中で、誰にでも、得意なこともあれば、苦手なこともある。教育の中では、自分にとって得意なものと苦手なものを自覚しながら、得意なことはさらに伸ばしていきたい、苦手なことはもっとできるようになること、それを知る機会でもあると思う。

特別支援学級の子どものも本当に増えており、中には本当に素晴らしい造形作品を作ったりすることもある。これもやはり得意なことを伸ばしていくことの1つだと思う。また体育では、みんなとまじって一緒にやるインクルーシブ教育も進められており、特別支援級の子であろうと、通常級の子であろうと、自分も技能を磨く、学力を伸ばすこととともに、みんなでも楽しめ、作っていけるというのが学校教育のよさと思っている。

（武田委員）

先程、大成委員がおっしゃっていた表現という括りは私も共感するところ。先程来、スポーツと文化の融合が難しいのではないかなという言葉が、はたしてそうであ

ろうかと思っていた。ご提示された施策を見ると、市民が楽しんで、この市に住んでいる方が、楽しいことやいいイベントが沢山あり、住むことを楽しめるということに繋がると考えている。

それはスポーツも文化も同じであり、子どもたちはもちろん、老若男女皆様同じように楽しいという気持ちはある。多様性という言葉もあるが、決してどんな立場の人にも変わらない。

ただ、経済状況で会得しにくい環境がスポーツにも文化にも必ずある。どこで発信し、どこで享受するチャンスが得られるのかが、一番大事であり、子どもたちにとって一番身近であり、長い時間を過ごすのが学校なので、そこで、何を享受し、何を見て知ることができ、何を体験できるのかは、すごく大事である。そういったものを創造するために、この部が発足していると考えたい。

(和座委員)

今の武田委員の話とも通じるが、幸せな気持ち、楽しい気持ちが、非常に本質的なところではないかと思う。

日本人の子どもは、精神的に不幸であると感じている部分が非常に多く、OECDの中で最下位と言われたこともある。身体的な部分については、日本の小児医療はトップクラスで死亡率も低い。この身体的な部分と精神的な部分のアンバランスの原因として、ある専門家は、子ども自身が自分を認められ、自分が大切にされているという気持ちが低く、この自己肯定感がきちんとあれば、精神的な楽しみや幸福感に繋がってくると指摘している。

だからこそ、子どもたちの声を我々大人がちゃんと吸い上げながら、彼らが話しやすく、彼らが話したことを認めてあげながら、施策につなげていくことが重要であると思う。

(熊倉会長)

日本社会は、大変豊かであることは明白であるが、今ご指摘があったように、日本の子どもが世界でみると自己肯定感が低い。これはなぜなのか。

そして、世界的に見ても、多文化共生が進んでいる。

松戸は子ども会が盛んで、地域のネットワークとして、特にスポーツに着目した活動を続け支えているところもすごいと感じたが、子ども会を支えている家庭についてもっとしりたいと思う。

施設の老朽化は、市も課題と認識し、本日施設方針が示され期待する。子どもたちを引きつけるには図書館等がもうちょっと魅力的な建築であったりすると、図書館で中高生たちが活動をし、町を紹介する冊子を作ったりとかしている自治体もあるように、施設は魅力的な場であることも重要であると思っている。

皆様方の活動がもう少し連動したら、新しい風が吹くと思う。

実際に多くの方々がその素晴らしい活動をしている松戸市だからこそ、審議会の

意見を取りまとめ策定するビジョンに向けて、基本、それぞれに素晴らしいご活動をしているので、次回までに、何が足りないのか、ご意見いただきたい。

連携という言葉があり、役所内の連動ももちろん必要であるが、言うのは簡単ではあるが実践は結構難しい。また市民側の連動のために、つなぐ何かが必要ではないか、必要なのは人なのか、お金なのか、仕組みなのか、みたいなことについて、ご意見を伺いたい。

子どもが1つ大きなテーマになると思うし、障害や多文化共生など、様々な意味で、ソーシャルインクルージョンを必要とされている方々に、松戸市は十分な環境があるのかなども伺いたい。ハードのバリアフリーはもう言うまでもなく、ホールではバリアフリーの環境は整っていると思うが、活用されていない。何が足りないのか、ということだと思うが、どのようなことが必要なのかという論点も、次回ぜひ皆さんからご意見を伺いたい。

それから、松戸市は、トップアスリートやトップアーティストがおり、住んでいらっしゃる方々もたくさんいるが、どういう連動や施策展開が可能なのか、アイデアがあればいただきたい。

今回は、年をまたぐので、皆様周りの方々の広いネットワークで、ぜひ周りからも情報収集などにも努めていただければと思う。

5 その他

- ・教育長より挨拶。
- ・事務局より、追加意見や質問をメールで送付いただくよう連絡。
- ・事務局より、次回会議は2～3月の開催を目指し日程調整を行うことを伝達。

閉会